



| | |
|--------------|---|
| Title | ハーディとバトラーの比較：ヴィクトリア朝の青年像を通して |
| Author(s) | 高橋, 弥生 |
| Citation | Osaka Literary Review. 1969, 8, p. 54-67 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/25759 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハーディとバトラーの比較

—— ヴィクトリア朝の青年像を通して

高 橋 弥 生

ヴィクトリア朝の片寄った精神文化に対する批評は十九世紀後半から二十世紀初頭の英文学に様々な形で現われた。Hardy の小説においても *Tess* の中の Angel と *Jude the Obscure* の中の Jude は特に Hardy の時代に対する批評を代弁する人物達であり、このふたつの小説で展開される主題は、宗教的な社会の因襲からの自然な人間性の解放である。一方、Butler は *The Way of All Fresh* の中でこの主題をさらに大胆にとりあげている。そして、この作品の主人公 Ernest と *Tess* の主人公 Angel とが、この主題展開の素材として根本的な共通点を有している事は注目に値する。本論は、Angel と Ernest が持つ共通点を基盤にこの二人の青年の生き方を考察し、Butler との比較によって、この主題の展開法における Hardy の独自性及びその背後にある Hardy の思想をとらえようとするものである。

素材としての Angel と Ernest の共通点は両者の父親が共に牧師である事と、両者の主張するところがキリスト教放棄による自然な人間性の解放にあるという事である。

従来、*Tess* 批評の多くは *Tess* 自身に焦点があてられ、とかく他の登場人物は影がうすく、Angel といえども単に *Tess* の精神面を象徴する人物と見られがちであり、しかも、*Tess* 同情のあまり「冷血漢」「卑劣漢」等の汚名を着せられて来た。しかし、彼を *Tess* からはなして独立した一個人間として見る時、決してこのような汚名の下に無視出来ぬ積

極的な価値を彼が作品に与えている事は明白である。

たしかに彼は道徳的、人間的には完璧ではない。しかし、時代背景を考慮すれば、彼は相対的に高く評価してよいものを持っている。

Angel は Dorset の片田舎に住む熱心な Low Church の牧師の三男として生れる。兄二人が Cambridge に入り聖職、学職についているのに対し、近代思想の洗礼を受けた Angel は、キリスト教を受け入れる事が出来ず、聖職につく事を断念する。又、大学とは聖職につく為の手段にすぎぬと考える家の伝統に従い、Cambridge 行きも断念せざるを得ず、彼は農場経営者として身を立てる決心をする。

一方、*The Way of All Fresh* の Ernest は、Battersby に住む牧師 Theobald Pontifex の長男として生れる。父親の厳格きわまるスパルタ式教育の下で育った彼は、もともと単純で感化されやすい性格故に自我なるものを失ってしまい、父の言う通り Cambridge に入り、再には若気のいたりからキリスト教に熱狂し、わずか 23 才にして London の貧民窟に身を役じ、伝導に全靈を献げる。しかし仕事の不成功により、ひそかに芽生えて来ていたキリスト教への懷疑心はいよいよ強まる。この精神的不安はついに爆発し、彼は同じ下宿の女性に暴行を働きかけようとした罪で、6 ヶ月の獄中生活を送る。出獄後、彼は父母をも含め、過去との絆を一切たち切り再出発すべく仕立屋を始める。しかし幸運にも叔母の遺産を相続するようになってからは、自由思想家としての文筆生活に入るのである。

上述の如く、Angel と Ernest は共に聖職につくべく育てられながら異端児となり自由思想家としての道をとるのであるが、この主題の展開の仕方及びその背景となる思想において両作家は非常に異なる。

Butler の描く Ernest を語るにはまず彼の父を知る必要がある。Ernest の父 Theobald は自ら進んで牧師になったのではなく頑固な父の

命令に従い、しぶしぶ聖職につく。彼は自分がこの職業にむいていない事を知ってはいたが、懷疑心を抱く事を己れに対して許さぬ習慣がついていたし、又、完全な俗物であった為、宗教を好みも信じもしていないまま仕事に専念する。彼の教育方針も又、父からうけついだものであった。つまり子供達の心の中に親への反抗心を一切芽生えさせぬようしつける事である。これは社会の因襲をそのまま踏襲する無知と愚鈍のなす業であり、代々伝わる家長制度、残酷な教育法は、父を恐れる不健全な子を育てるのに役立つだけであった。生来単純、軽信な Ernest は牧師としては尊敬する父の言う事を正当と認めざるをえず、父に盲従する。彼が Cambridge 在学中にキリスト教に熱中した原因を彼の名付親である話者は次の如く述べている。

The sense of humour and tendency to think for himself, of which till a few months previously he had been showing fair promise, were nipped as though by a late frost, while his earlier habit of taking on trust everything that was told him by those in authority, and following everything out to the bitter end, no matter how preposterous, returned with redoubled strength. I suppose this was what might have been expected from anyone placed as Ernest now was, especially his antecedents are remembered¹

一時的な熱狂が長続きするはずはなく、やがてキリスト教を捨てる時が彼にやってくる。その理由はまず、実際に伝導をつづける内に悟った理想と現実との相違であり、宗教というものが貧乏な人々の魂の救済にはもはや役立たなくなっているという事である。再に、虚偽に盲従して来た彼の心の奥底で芽生えていた ‘a subtle, indefinable malaise’² つまり自然な人間性の欲求がついに爆発した事である。この懷疑の時代に聖職につく事が如何に困難な事であるか Ernest は身をもって知った。真理の基準と

なるものは理性ではなく信念であるという事を彼はうたがいはしなかったが、この時代に正しく生きるには、キリスト教の歴史的根拠の不合理性を追求する必要があった。キリスト教のこの難解な部分に対する解決の努力もせず骨折りもとらず、それを真とし金をもうけている聖職者達の虚偽が今や明白になったのである。しかも彼を再に悩ましたものは、自分に牧師になる事を勧めた父も又この事を知っていたという事である。

かくて宗教という精神的権威の崩壊は、家庭における精神的権威である父親像の崩壊と直結するのである。Ernest の半生は目かくしされた人間が、一步一步手さぐりしながら生きる道を求める苦しみそのものであった。しかし、代々伝わる内に形式化して血のかよわぬものと化してしまった家庭教育がついに破綻をきたし、又、人々、宗教に無関心になってきた社会がもはや Ernest の宗教を受け入れぬところまで進んでいた為、Pontifex 家何代にもわたってふみにじられて来た人間性が、Ernest においてついに革冷を起したのである。

一方、Hardy の描く Angel は自信と理想に燃えた異端児であり、虚偽に盲従する Ernest とは、その性格が根本的に異なっている。Angel をして教会への道を断たしめたものは、厳格で宗教的な家庭環境も考えられるが、より本質的な原因は彼の精神に宿る ‘a hard logical deposit’³ であると Hardy は言う。これは彼の性格の核を形成し、これを侵すものはすべてはねのけてしまう。キリスト教の教義には彼のこの ‘deposit’ を侵すものがあった。彼は父に次の如く語る。

I cannot honestly be ordained her minister, as my brothers are, while she [i. e. the Church] refuses to liberate her mind from an untenable redemptive theolatry.⁴

又、教義を文字通り解釈出来ぬのに福音の徒となる事は、偽善的行為でしかない。彼は大学で学究の徒になりたかった。しかし、両親の事を思えば、聖職につく目的もなく大学教育を受ける事は彼の良心が許さなかつ

た。両親の宗教的偏見には気付いていたが、Angel は両親に対して宗教以前の問題である深い肉身の愛を抱いていたし、両親の素朴な信仰心を傷つけたくはなかった。

自分の生涯が大きくゆがめられたという挫折感をはらいのける事は出来なかつたが、精神的、物質的危険をおかしてまでも守るべき信念を彼は持つていた。‘the lathe of a systematic tuition’⁵とも言うべき大学から年々送り出される個性のない人物になる事は、自己に対しても社会に対しても何ら益するところがないと彼は思う。大学行き断念は彼をますます異端の道へとけしかける動力となり、生来の脱俗精神は俗な世間への軽蔑感をますます強めるに致る。

Angel は強靭な精神の持主である。それは人間を人間たらしめる唯一の資源一創造力一を自由に働かせる精神である。それは眞の宗教家、哲学者、芸術家に象徴されるものである。ヴィクトリア朝とは機械と教会のみを権威とする中産階級、名ばかりの貴族階級に代表される道徳や礼儀作法が社会を支配していた。

かかる時代を背景に独自の立場を維持する Angel は高い理想主義精神の持主である。彼には時代の思潮を敏感にとらえる感受性がある。Ernest の如く受動的ではない。能動的、反抗的、摩擦、抵抗のある生き方を彼は自らえらぶのである。かくてひとつの観念を持った人物としては、Ernest よりもあざやかに浮び上って来る。彼を支配しているものはひとつの情熱であり、従って彼はこの情熱を代表するひとつの典型である。この点 Hardy の Angel 創造は Butler の人物創造に比べて観念的である。又、Angel は Pontifex 家が少なくとも二代にわたる父子関係を通してなしとげた事を一人でやつたのである。Hardy が Angel を感受性つよく ‘subtle poetical man’⁶にしたのも、Butler が年代記風に世代関係を通してとりあげた時代精神の変化を、彼は Angel 個人の中で展開しようとした為である。従って、そこにあるのは Butler が試みたような

漸進的な人間成長の過程そのものではなく、一個の人間の行動であり、記録ではなく、物語である。この点 Hardy の主題のとらえ方は新しい方法を示すものではなく、従来の英國小説の伝統をひくものである。

一方、*The Way of All Flesh* は主人公の名付親が Ernest の経験を語るという形式をとっている為、物語というよりは事実の記録であり、その為か Ernest の主人公としての迫力は非常に弱い。Butler の試みたものは人物の創造ではなく、環境により形成される個体への実験である。因襲的な環境に盲従してきた人間のきたす破綻である。しかも盲従するよう子供を育てた親達も悪いのではない。

... it was the system rather than the people that was at fault. If Theobald and his wife had but known more of the world and of the things that are therein, they would have done little harm to anyone. Selfish they would have always been, but not more so than may very well be pardoned, and not more than other people would be. As it was, the case was hopeless; it would be no use their even entering into their mother's wombs and being born again. They must not only be born again but they must be born again each one of them of a new father and of a new mother and of a different line of ancestry for many generations before their minds could become supple enough to learn anew.⁷

更に重要な点は、Ernest の経験が 'natural' であるとすれば、Angel のそれは 'ironic' であるということである。Ernest の場合、かかる家庭環境の下では、彼はあのような道をたどる外はなかったのであり、一方 Angel の場合に強調されている事柄は、こともあろうに牧師の家に異端児が生れたという事である——父が Paul の書に示すのと同じ熱意で息子は Huxley の書を読んだ。⁸ 父が Hebraism に与えていたのと同等の

真理を息子は Hellenism に与えていたのであり、父は神の栄光の為に、¹⁰
息子は人間の栄光の為に学問をしたのである。¹¹

Ernest と Angel の置かれるこの ‘natural’ な状態と ‘ironic’ な状態の相違は彼等の女性関係にもあてはまる。Ernest が幼馴染の Ellen と何年ぶりかに再会し、相手がアルコール中毒患者である事を知らず、昔のままの田舎娘と思いこみ早急に彼女と結婚するのも軽信、単純な Ernest のやりそうな事である点、全く自然である。一方、革新家で、名もなき庶民の崇拝者である Angel が、 Tess の過去を知るや否や因襲の虜となり彼女をすて去るのは、理想家肌の青年にありがちな弱点をついた ‘irony’ である。

このように Hardy の示す多少理想化された人物像、観念的、 ‘ironic’ な構成、 ‘orthodox’ な物語風の話の進め方、 Angel 自身に見られる理想主義的要素は、 Butler のフランス的な自然主義の手法とは異なるものである。Butler が英文学史上、理論的、散文的な自然主義の手法の先端を切っているのに対し、 Hardy は伝統的な技巧を大いに活用している。彼はヴィクトリア朝における従来の物語風な創作手法を最後まで用いながら、いち早く自然主義的題材をとりあげ、近代社会の諸問題と取り組んだ作家と言えよう。

自然な人間性の解放という主題を Hardy は Angel に託して展開したのであるが、この主題の背後にある思想においても、 Hardy は Butler と非常に異なる。

ヴィクトリア朝における宗教批判は主として次の点で行なわれている。つまりキリスト教そのものの持つ歴史的、形而上の根拠の不合理性と、社会道徳の権威と化したところから出て来るキリスト教の社会に対する弊害である。当時、不信の徒が多くなったとはいえ、公然とキリスト教を攻撃すればやはり異端の徒とみられる程、いまだ宗教が根強く生活の中にしみ

こんでいた時代であった。Angel にしろ Ernest にしろキリスト教に懷疑は抱いていたが、教会は彼らにとり母親のようなものであり、何らかの形で素朴な信仰心を持ち続けたいと思うのである。かくて彼らのとる道はキリスト教信者である事を公言せぬ事である。これが宗教的、中産階級的偽善からのがれ、自由に宗教批判をする事を可能にする唯一の道である。しかし、宗教を個人のものにとどめてしまえば、その当然の結果として個人は宗教的に成長はしないし、又、ひとつの信仰を多くの者とわかちあう事を止めてしまえば宗教そのものも成長を止めてしまう。この事は、宗教が衰退してゆく過渡期におけるひとつの過程であろう。感情的、個人的には宗教に対し名残り惜しい気持を強く抱く一方、理性的、社会的観点からはそれを強く批判する Angel や Ernest は宗教問題に対するヴィクトリア朝人の態度を象徴している。

信者である事を公言せぬという事は、彼らの場合性格の弱味から出た卑怯な態度を示すものではない。何故なら宗教に代るより大切なものを彼らは求めているのであるから。つまりそれは人間性の解放とも言うべきものなのであるが、それぞれの作家においてこれが何を意味するか考察する必要があろう。

もし Angel が父と同じく聖職についていたならば、年令差と同等の距離を精神的にも持っていたであろう。幸か不幸か、一農場主として身を立てる決心をしてからの Angel は父にまさる精神的発展をとげるのである——つまりヴィクトリア朝の精神文化が欠いている面を彼は悟るのである。彼が百姓になる事をえらんだのは、そのような職業には ‘Intellectual Liberty’¹² が可能だからである。百姓には牧師に求められるような一定の信条はないのである。キリスト教をも含めた広い知識の獲得、主義主張の自由な選択こそが、精神発達の不均衡を正すものである。教会万能、大学万能の兄達、中産階級的偏見を持つ両親を見るにつけても、Angel にとってこの ‘Intellectual Liberty’ はますます重要になる。

Hebraism 偏重の思潮に対する Hellenism の台頭はヴィクトリア朝の一部の知識人や芸術家の間に広がっていた現象であるが、Angel にも同様の傾向がある。

Once upon a time Angel had been so unlucky as to say to his father, in a moment of irritation, that it might have resulted far better for mankind if Greece had been the source of the religion of modern civilization, and not Palestine.¹³

Original Sin を認め、人間完成の困難を自覚した上で、神への道に専念する事は苦難の道である。自己克服、自己犠牲、服従の徳を極度に達成するには、人間性のもうひとつの面、つまり美と快樂を求める人間の本性が犠牲にされがちである。Hellenism においては人間性の自然への復帰、生の喜びを与える自然の力の贊美、物事をありのままに見る明晰な知性、対象を美的観点からとらえる審美眼、柔軟な情操の働きが謳歌される。¹⁴ Angel が悟った事は、キリスト教はもはや近代文明社会における人類進歩の中心的思潮ではなく、物事を白紙にもどし、自己を、世界をあるがままに見る精神を培う事の必要性である。

搾乳場で農業修業中の彼は、豊かな自然、みずみずしい乳しづりの娘達、異教の女神にもまがう Tess にかこまれて ‘aesthetic, sensuous, pagan pleasure’¹⁵ にひたり、それまでの厳格な牧師館での生活にくらべると、まるで副木や綿帯を役げすぎてたような解放感を味わうのである。¹⁶ 辺鄙な田園に身を役じている Angel の Hellenism 的傾向は、‘academic’ な要素と共に原始的な自然宗教の色彩をもそなえていると言ってよい。

Angel にみられる ‘Intellectual Liberty’ の傾向は Ernest にも見られる。聖職をやめ、文筆家として身を立てるにあたり彼は次のように述べる。

I don't know whether I have any strength, but if I have I dare say it will find some way of exerting itself, I will live as

I like living, not as other people would like me to live.¹⁷

この為彼は両親を捨てる。両親こそが眞実で永続的な生き方の邪魔をする最も身近かな人物だったからである。他人にあまりにも従順であった Ernest にとっては、自分の生活を高く評価し、因襲を無視してそれを固守する事から始めるより外なかった。生活が落着くに従い、彼は自由な立場から宗教、家族制度、結婚等の問題について評論を書くようになる。彼は政治的には保守党であるが、他の凡ての点において革新的である。Ernest は、Angel と同じく ‘the advanced and well-meaning young man, a sample product of the last five-and-twenty years’¹⁸ の列に加わるのである。Hellenism へのあこがれは Ernest の場合も明白である。結婚と家族制度という問題をとりあげるにあたり、彼は実際に各国を旅行し、どの国民が最も活気があり、善良で美しく、愛すべきかという調査にのり出す。結局、当代のイタリア人、古代ギリシア人、ローマ人及び南海諸島人が彼の理想的人種なのである。

自然な人間性の解放という問題を ‘academic’ な面でとらえる時、Angel と Ernest には上述の如く共通点が多いのであるが、それを実生活の面でとらえると相違点が目立つのである。Angel が聖職に代って百姓になる道をえらんだのと同様、尚程 Ernest も又仕立屋になる。下層階級の中へ入りこめば、不面目な自分の過去も問題にならぬし、紳士である事が Ernest に益する所は何もなかった。只人にだまされる餌になるだけであった。¹⁹ 仕立屋になって始めて彼は自由と独立を感じた。大学教育というものが如何にも虚偽的、病的である事を悟った。再には下層階級への理解と同情を深めたが、今までの彼の生活に欠けていたのはまさにこの ‘kissing the soil’²⁰ だったのである。ただし Ernest の場合、この大地に触れている事が単に一時的な経験に終っている点、Angel と大いに異なる。Ernest は結局のところ莫大な遺産を相続し、裕福な文筆生活に入るのである。

遺産が彼を庶民生活から離してしまうのであり、この事は Butler の思想が Hardy ほど徹底したものではない事を示すと同時に、上流社会をとりあつかった陳腐な物語に陥りかねない程、作品の迫力を弱めている。

Angel にとっては大地に触れる事そのものが彼の一生となる。 Dorset の片田舎に住む百姓達と寝起きを共にする事により、彼の前には全く新しい世界が開けた。外から見れば単調な田園生活、個性のない百姓達も、一度内に入れば変化に豊んだ生活と多種多様な人間像へと分解してゆくのである。²¹ Angel はここに真の人間生活の姿を見、学者や牧師にのみ開けている世界の外で働く複雑な生の営みにつきせぬ興味をおぼえ、社会に対する古い固定した観念をうちすてて、人生と人間性の中に何か新しいものを発見し、なまの人生が彼の宗教となるのである。かくして彼は外面向けの教養、貴族的な血統、物質的榮達を軽蔑し、歴史に名も残らず、黙々と生きて来た農民に大きな期待をかけるようになる。何故なら、農民生活の中には今だに宗教的教義や社会の掟によりゆがめられていない情熱的な生への脈搏が残っているからである。

たしかに Angel は Tess との事件で理想家にありがちな欠点を暴露した。しかし処女喪失嫌悪の念を新しい倫理感で克服した彼は、一段と精神的発展をとげるのである。Hardy は Angel を一般に思われている程、悪人あつかいはしていない。²² 彼が大学を捨てた理由は正しく Hardy 自身のものであり、農民階級への理解と同情は Hardy 文学の根底を成している。

今までの考察にても明らかに如く、Angel と Ernest の進む方向は異なっている。聖職を退いてからの Ernest は極端に走る事を悪とし、如何なる主義にも微温的である事を善とした。そこから出て来るものは保守主義、静寂主義である。彼は確かに紳士階級には属していないが、同様に他の如何なる階級にも属そうとしないのである。ごく少数の友人と交際し、社会から孤立する事を望む。つまり社会的な人間関係をたってこそ始めて

個人の自由は得られると彼は考えるのである。しかも遺産相続が彼にこのような態度をとる事を可能にした大きな物質的背景として働いている。

Erewhon の中においても Butler は、社会から一步身をひいて社会の因襲、偏見を考察し、本能と理性の均衡を保ち、極端に走らぬ平静さを保つ者を最もすぐれた人間としている。この意味において Butler の理想的人間像は ‘aristocratic’ であり ‘academic’ である。勿論、血統上の貴族ではなく ‘natural aristocracy’²⁴とも言うべきものである。更に又 *Erewhon* では勿論 *The Way of All Flesh* においても Butler が強調するのは人種改良とでも言ってよいものであり、外面的な肉体美や礼儀作法にあらわれる良い血筋、良い育ちの繁栄である。

金持で健康で常識に富む Cambridge 時代の友人 Towneley は Ernest の憧れの的であったが、彼も又 Towneley 的人物に近づくのである。自由で裕福な生活は彼を美男子にした。無頓着と上機嫌が彼の顔にあふれ、身心共に逞ましく健康と活力に満ちてきた。母危篤のしらせに毎年ぶりかに帰省した Ernest は豪華な旅装に身をかためた上流紳士以外の何者でもなかった。かくて仕立屋をやめた Ernest は、精神的には完全に変化していたが、再び元の社会的地位へと戻って来たのである。

一方、農業修業にのり出した Angel はどのように変化したであろうか。時折農場から帰宅する Angel は家族の者の目から見ると、百姓風情が身に着き、‘the manner of the scholar,’ ‘the manner of the drawing-room young man’²⁵を失い、教養のない田舎娘を妻にするに致っては全く文明世界から遠ざかってしまったとしか思われぬのである。

如何なる知識人をも大地へとひきすりおろすのが Hardy の主義である。*The Return of the Native* の中の Clym にせよ *Jude the Obscure* の中の Jude にせよ、高き理想と深い学究精神の持主であるが、下層階級と共にあってこそ己れの ‘element’ の中に居ると感じるのである。Angel の言う如く ‘We all are children of the soil’²⁶ であってみれば、社会的

扮装をまとわぬ裸の人間、名誉や富とは関係のない素朴な農民達、社会の土台となる最も不变なこの庶民を内側から知る事、すなわち眞の人生の姿を知る事であると Hardy は強調するのである。

Hardy は自分の思想、感情を反映する対象を身近な現実の社会の中にもっていた作家である。彼の場合 Dorset の農民に代表される庶民がこの対象であり、彼にあっては現実の生活に根を持たぬ人間こそ最も何も知らない人間なのである。

Butler は貧民窟の宣教師としての Ernest にも、仕立屋としての Ernest にも満足せず、孤立した知識分子を彼の行きつく港とした。確かに彼は階級意識の拘束は受けていないが、彼の場合それは社会の如何なる層とも連帶性を感じないところから発しているものであって、そこには自己耽溺の危険性がある。

すなわち中産階級からの脱皮、自然な人間性の発展といえども Hardy にあっては下層階級との同化という意味において ‘democratic’ な理想がその背後にあり、Butler においては現実社会からの孤立による個人の自由の確保という意味において ‘aristocratic’ な思想が背後にあるのである。

注

1. S. Butler, *The Way of All Flesh*. (Grosset & Dunlap), pp. 274 —275.
2. *Ibid.*, p. 299.
3. T. Hardy, *Tess of the D'urbervilles* (Macmillan, 1927), p. 308.
4. *Ibid.*, p. 149.
5. *Ibid.*, p. 204.
6. L. Lerner & J. Holmstrom, ed., *Thomas Hardy & His*

- Readers* (The Bodley Head, 1968), p. 96.
7. S. Butler, *The Way of All Flesh*, p. 329.
 8. T. Hardy, *Tess*, p. 202.
 9. *Ibid.*, p. 410.
 10. *Ibid.*, p. 203.
 11. *Ibid.*, p. 150.
 12. *Ibid.*, p. 151.
 13. *Ibid.*, p. 203.
 14. M. Arnold, 'Hebraism and Hellenism,' *Culture and Anarchy* (Macmillan, 1925)
 15. T. Hardy, *Tess*, p. 203.
 16. *Ibid.*, p. 216.
 17. S. Butler, *The Way of All Flesh*, p. 462.
 18. T. Hardy, *Tess*, p. 338.
 19. S. Butler, *The Way of All Flesh*, p. 435.
 20. *Ibid.*, p. 350.
 21. T. Hardy, *Tess*, p. 152.
 22. *Ibid.*, p. 153.
 23. L. Lerner & J. Holmstrom, ed., *Thomas Hardy & His Readers*, p. 96.
 24. Richard A. Levine, ed., *Background to Victorian Literature* (Chandler Publishing Company, 1967), p. 128.
 25. T. Hardy, *Tess*, p. 204.
 26. *Ibid.*, p. 471.